



災害廃棄物処理で地域に貢献 敷地の約半分を仮置場として

●(株)佐倉環境センター

所在地	千葉県佐倉市
代表	小出英昭
	(2025年3月1日時点)

2024年3月、千葉県旭市と災害廃棄物等の処理に関する協定書を締結した佐倉環境センターは、建設廃棄物の処理リサイクルが主力で住宅解体工事も手掛ける産業資源循環のプロフェッショナルだ。これまで災害廃棄物の処理に協力し、実績と信頼を重ねている。市との協定では2023年7月に旭市内にオープンした「旭エコ・プラント」の敷地の約半分(未整備)を当面仮置場として提供する。今後も、災害廃棄物の迅速な処理で地域に貢献していく。

注目される 廃蛍光管の破碎処理

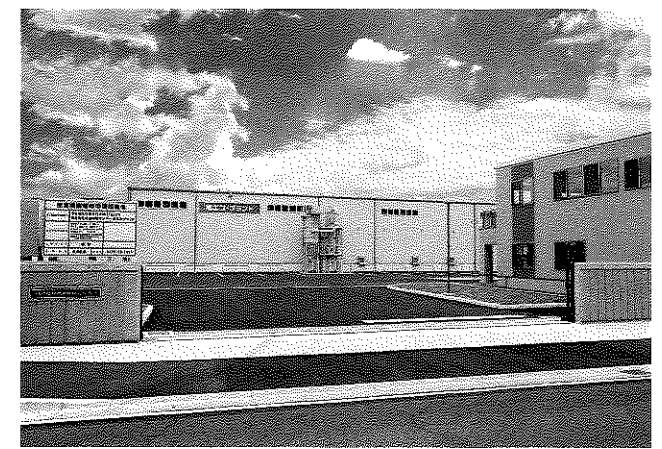
同社の設立は1986年(昭和61年)2月。資本金は3000万円、社員数は2025年1月28日現在、67人(内契約社員・パート10人)としている。

主な事業は、産業廃棄物収集運搬及び一般廃棄物収集運搬、産業廃棄物中間処理及び一般廃棄物中間処理、木材チップの製造・販売、建築物解体工事全般、一般貨物自動車運送事業、第一種フロン類回収業など。長年にわたり、最終

処分場のひっ迫や不適正処理の増加など環境への負荷と向き合い、産業資源循環業として社会的責任を果たしてきた。それらの功績が評価され、全国産業廃棄物連合会(当時)功労者表彰(2008年6月)、千葉県知事環境功労者表彰(2008年11月)、環境大臣表彰(2016年11月)をそれぞれ受賞している。

本社敷地内に設置されているのが佐倉エコ・プラント。同プラントは、木質チップなどの生産に長けている。解体工事現場や工場などから発生する木くずを受入れ、木くず破碎机で破碎し、磁選機や金属探知機で異物を取り除き、燃料チップなどとして販売・出荷。廃棄物卒業となるため、マニフェストE票を発行できるのが強みだ。

注目されるのが廃蛍光管の破碎処理。蛍光管を破碎し、ドラム缶に密封して搬送。蛍光管内の水銀は吸着剤でトラップして同様に搬送するやり方だ。国際社会では直



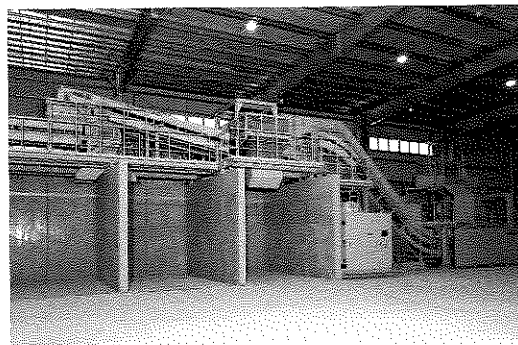
佐倉環境センター旭エコ・プラント

粗大ごみも破碎できる 旭エコ・プラント

旭エコ・プラントは、さくら台工業団地内に設置された。注目さ

れるのが破碎困難物である軟質系プラスチックやスプリング入りマットレスなどの粗大ごみも破碎できること。

2025年1月には旭市から一般廃棄物収集運搬業及び処分業の許可を取得している。現在、受け入れ、処分できる一般廃棄物は、市の東総地区クリーンセンターで受け入れられない廃棄物であって、破碎による処分が可能な固形物に限るとして、品目は次の通り。アルミサッシ、石(石臼)、エレクター、オートバイ、オルガン、温水器、かわら、金庫、建築・建



破碎設備

設廃材、コンクリートブロック、サーフボード、サイディング、システムキッチン、自動車部品、砂利、石膏(石膏ボード)セメント、タイヤ、太陽熱温水機、タイヤ、電気温水器、電動カー、電動車いす、ドラム缶、塗料、パレット、ピアノ、家庭園芸用ビニール、肥料の袋、プレハブ、風呂釜、便器、ボイラー、ポンプ、浴槽、レンガ、樹木・枝・竹、スプリングマットレス。

旭エコ・プラントは、大型車両によるさまざまな廃棄物の搬入が容易で、なおかつ、敷地の約半分



選別設備

(1万㎡)が未整備で廃棄物を大量に保管できるのが強みだ。「将来的には、地域性を踏まえた新たな処理リサイクルプラントの設置を考えていますが、当面は災害時などの非常用地として供用するつもりです」(同社担当者)

災害廃棄物処理では、2023年の大雨で、同社の社員が仮置場を運営管理した実績もある。「仮置場が廃校でしたが、大型車両が入れるかどうか、ぎりぎりだったことを覚えています。平常時から自治体の職員を対象に仮置場に関する実地研修の機会が持て



敷地の約半分(写真右上)を仮置場として提供する



佐倉環境センター本社/佐倉エコ・プラント

たらいいだろうと強く思いました。今後も、複数の自治体と連携しながら、廃棄物処理・資源化の専門家として、災害廃棄物の処理に協力し、地域に貢献していきます」(同社担当者) W (本誌・加藤)